

なか じま みね お

# 中嶋 嶺雄 さん

\* 中国学者

一九六六年は中国の革命家、孫文の生誕百周年の年でした。それを記念する行事が北京で開かれたのですが、私は思いがけずこの大会に招待されたのです。

当時は東京外国語大の助手で、まだ三十歳。「現代中国論」という最初の本は出ていたから、若手学者ということで選ばれたのでしよう。僕には願ってもない好機でした。というのはこの年、中国では文化大革命が始まっていたからです。

街には「毛沢東万歳」を叫ぶ紅衛兵の若者たちが練り歩き、写真、彼らの圧力を背景に多くの人が「反革命分子」として批判され、失脚していく。日本にもそんな情報が伝わっていました。でも「文革の本質」というのはなかなかわからない。それを自分の目で確かめたいと思ったんですね。

式典があったのは十一月十二日、北京の人民大会堂でした。ただ妙な感じがした。こうした場合に

現代中国研究の第一人者で、前東京外語大学長の中嶋嶺雄さん(67)にとつての転機は「一九六六年」だったという。時あたかも文化大革命のあらしが吹き荒れ始めた時期。初の中国訪問は、自らの中国論を築き上げる上での原点となった。(聞き手・時田 英之)



毛沢東が出てこないのはよくあることで、彼がいないのはわかる。でも、記念撮影の時になっても国家主席の劉少奇と共産党総書記の鄧小平が来ない。二人は他の要人が席に着いた後、遅れて登壇しました。しかし会場には拍手ひとつない。やがて周恩来首相が立ち上がり、「いかなる偉大な革命家であっても、毛主席にそむく輩に未来はない」と演説した。劉少奇を見ると顔面蒼白で、会場は禁煙なのに立て続けにたばこを吸ってはもみ消している。明らかに劉少奇が批判されているのです。

あの時の私

# 文革目撃、それが原点

その瞬間ひらめきました。「文化大革命とは、実は単なる権力闘争ではないのか」

その後、上海や広州など各地を回りました。目立たないよう汚い格好で街に出て、壁新聞を読んだりした。そうして得た情報は、みな直感を裏つけている。やはり扁国内に滞在した香港では、こんな話も聞きました。

△権力中枢で、毛沢東は実は少数派。そこで彼は北京を脱出し紅衛兵を使った大衆運動を展開、「実権派」の鄧少奇、鄧小平らを追いつつ追いついてる。

のちに鄧小平は復権しますが、劉少奇は死んでしまいます。僕は文化大革命の本質は「権力闘争の大衆運動化」だという結論に達しました。でも、当時の日本の論壇は「文化大革命は資本主義を乗り越えようとする革命」「毛沢東は偉大な革命家」といった文革擁護論が一般的。だから悔しい思いもしましたよ。座談会に出ても記事にならずに発言はバツサリ切られて



社会変革にかかわる仕事ができれば、と思ったからなんです。ところが次第に疑問が出てきた。結局、中国は毛沢東を絶対化しているだけではないのか。そんな思いを決定的なものにしたのが、六六年の中国での体験だったので。

結局、毛沢東死後の七六年に、文革派の江青らが逮捕されて文革は終息します。文革は権力闘争であるという考えが認められるまで、十数年かかったんですね。でもわかる人はわかってくれる、とずっと思っていた。そういえば、こんなこともあった。廖承志さんは日中友好に生涯を尽くした中国の政治家ですが、やはり文革時代に批判を浴びた。彼が亡くなる直前、人を介して僕にメッセージが届けられたんです。「文革の時代、私は中嶋さんの論文を読んで慰められました」とありました……。

確信があったか

届けた、という

中国革命に共感

実は、僕にも

1936年 長野県松本市に生まれる  
1960年 東京外国語大中国科卒業  
1964年 処女作「現代中国論」出版  
1965年 東京大大学院修了  
1966年 東京外大助手に。のち講師、助教授を経て77年から教授  
1981年 文革評論の集大成「北京烈烈」でサントリー学芸賞  
1995年 同大学長（2001年まで）  
2002年 北九州市立大大学院教授に。2004年開学予定の国際教養大学創設準備委員長に

「現場」を見て考えることがどれほど大事か、そのことを僕はあの中国での体験から学び、その後の研究生生活にも生かしてきたような気がしているのです。